

霧島の温泉近代史

霧島は江戸時代の紀行文にも登場する由緒ある温泉地であり、幕末から明治にかけて坂本龍馬や西郷隆盛が訪れたことでも知られています。では、霧島の温泉は近代以降、どのようにして広く知られるようになったのでしょうか。

『日本鉱泉誌』が物語る霧島の姿

明治19(1886)年2月に内務省衛生局は、日本初の組織的で全国的な鉱泉(温泉)調査報告書である『日本鉱泉誌』を発行しました。

この報告書は、国民の保健衛生向上を目指す衛生行政の一環として、また明治14(1881)年のドイツ鉱泉博覧会出品をきっかけに作成されました。各地の温泉の効能を、科学的な知見から分かりやすく整理することを目的とし、所在地や泉質、湧出量といった基本データに加え、利用状況や医学的効能が幅広く記録されています。

明治時代の入浴客数

『日本鉱泉誌』では、本市の温泉の入浴客数も記録されています(別表)。今では想像し難いですが、福山町の宮浦宮近くには二つの温泉があり、合わせて年間約11万6千人が訪れました。霧島の温泉全体で見ると、年間

約25万人もの利用者がいたとされ、当時の他地域の年間平均入浴客数を見ると、下呂温泉(岐阜県)は年間平均約千人、草津温泉(群馬県)は約2万4千人、別府八湯(大分県)は約4万3千人(別府温泉のみだと約1万人)とあり、これらと比較しても、当時の霧島が全国有数の温泉地としてにぎわっていたことが分かります。

調査が行われた明治12(1879)年・13(1880)年に新たに発見、整備された温泉であったことに加え、鹿児島市と宮崎方面を行き来する人々の主要な立ち寄りスポットであったことが、客数の多い要因と考えられます。

鉄道と温泉

大正時代に入り、現在の吉都線が全通。さらに昭和5(1930)年に霧島神宮駅が開業すると、湯治客に加え、霧島山への登山や霧島神宮への参拝を目的とする観光客が急増しました。これに伴い、硫黄谷周辺での宿泊や観光地としての整備が活発になります。

さらに、昭和9(1934)年に霧島が日本初の国立公園に指定されると、

『日本鉱泉誌』に記載されている霧島市関係の鉱泉(温泉)一覧

掲載名	現在の名称	旧地名	年間浴客	備考
福山宮ノ脇	-	曾於郡福山浦町字宮ノ脇	69,250	現存せず・宮浦宮島居脇
福山宮ノ下	-	曾於郡福山浦町字宮ノ下	46,815	現存せず・宮浦宮社前
硫黄谷	硫黄谷	桑原郡下中津川村字硫黄谷	40,627	
塩浸	塩浸	桑原郡宿窪田村字塩浸	27,846	
敷根	-	曾於郡麓村字濱田	15,975	現存せず
新湯東	妙見	桑原郡宿窪田村字新湯	12,865	
新湯西		桑原郡嘉例川村字四十田		
木之房	日当山	曾於郡内村字木之房	9,000	
安楽	安楽	桑原郡宿窪田村字安楽	7,697	
関平	関平	桑原郡三休堂村字関平	3,710	
栗川	栗川	桑原郡中津川村字栗川	3,413	
山ノ湯	山の湯	桑原郡嘉例川村字小牧原山	3,111	
鉾投	鉾投	桑原郡三休堂村字鉾投	2,968	
明礬山	明礬	桑原郡下中津川村字硫黄谷	2,856	
栄之尾	栄之尾	桑原郡下中津川村字栄之尾	2,741	
平落	平落	桑原郡宿窪田村字平落	1,943	
大良谷	太良	桑原郡万膳村字大良谷	1,260	
殿湯	殿湯	桑原郡中津川村字殿湯	368	

『日本鉱泉誌』の脱字を一部補い、旧字体は新字体に改めたもの。浴客数不明の温泉は省略した。

観光地としての知名度が一気に上昇しました。昭和11(1936)年に日豊本線經由の門司―鹿児島間の急行列車が運行を開始すると、関東・関西・九州から多くの団体客が訪れるようになりました。

一方、坂本龍馬ゆかりの地として知られる塩浸温泉は、明治末期に開業した嘉例川駅からのアクセスが確立されたことで発展しました。徒歩や馬、そして昭和初期には自動車での往来が可能となり、日用品も手に入る便利な場所として、観光客だけでなく「療養」や「非日常」を求める湯治客に根強く愛されました。

これからの霧島の温泉

近代以降の霧島は、「湯治・療養」の拠点としての基盤の上に、鉄道網の整備と「国立公園」というブランドが加わることで、日本を代表する観光地の一つへと進化しました。

時代とともに交通手段が変わり、訪れる目的が「湯治・療養」から「登山・観光」へと広がりました。その泉質の良さと旅の多様な目的に込める懐の深さで人々を魅了してきた霧島の温泉。先人たちが守り育ててきた霧島の温泉は、これからも大きな魅力として引き継がれていくでしょう。

(文責 坂元)